091　ぼやき　011219

　今日こそは本当のぼやきになるのだけれど、いやはやジジイになったと痛感することがあった。先日友人からの電話で、「ちょっとお願い　恩師が亡くなり　追悼文集を作ろうとして　印刷屋に行ったところ、２０万といわれた」「１０万ぐらいしか予算がないが　助けてもらえないか」一度会おうということになったが、原稿が集まるのがちょっと先、友人はちょっと旅行、責任者もちょっと旅行。帰って大慌てで原稿を整理、持っていくという。どうなることかと当日を待っていた。二三日の日程、コピペ、何とかなるのではとタカをくくっていた。

知力、体力、活力、が衰えていることはわかっている、街を歩いていてもひょろりとなる、スピードは女の人よりも遅い、自転車や車が怖い、そういうことを実感する。

山に入って歩かせれば、まだまだどんどん上り下りはできるのだが、山の地図に載っているコースタイムというのがあって、その時間より３割り増しぐらいの時間がかかってしまう、昔は 3 割減だったが。６時間以上の行程になってくるといささか疲れてくる。そんなことをいいつつ、山に入っている。「一人で山に入るのは怖いねえ迷ったり、こけたりすると　発見が遅れる」というわけだ。

家にいて、「さあ　あれをしよう」と立ち上がり、机の前に座って、「何をするんだったか」「何を取りに来たんだったか」「え　あれはなんという　名だったか」こんなことがしょっちゅうである。「何をぼけてる」とオレ自身が溌溂としていたころは大きな声で揶揄したものだったが、自身のことになると、「がはは　ちょい　ぼけているなあ」と苦笑しながらぼやいている自分に甘い姿勢が若者に嫌われそうだ。

話がとんでいるが、追悼文集の話に戻るとしよう。まる二日間空いているので何とかなるだろうとパソコンの前で仕事を始めた。印刷屋の値段表を見つめると、ページ数が 64 まで、印刷のための日数が長ければ安いが一日短くなれば 2.3 万円高くなる。「原稿を詰めて入れなくては　二日間でやっつけなくては」若いころといっても五十歳代のころの姿が目に浮かぶ。その当時は一日中机に座っていても平気だった、冴えた頭と元気な身体で、えいや、こらさ、どっこいしょ、出来上がったものが積みあがっていった。

「あ　まちがえた」「え　これはどうするんだったか」「あたまがぼうっとなって　つかれる」こんなことで長時間労働が続かない、よく間違える、隅々まで気が配れない、「なんと　おれは　ジジイなんだ」情けない自覚が押し寄せる。

予定が一日伸びなんとか発注までこぎつけた。パソコン君もいよいよ九年目、夏には大フレーズを起こし新品は来ているが、今回の仕事が終わったら引っ越ししようと思っていた、今、新しいパソコン君でこの文章を書いている。多分ボケたパソコン君、保存の段階で、保存しわすれか、データがとんだか、と解釈している。だって、オレが、そんな操作を失敗したとはまだまだ思いたくないもんだから、悪いのはパソコン君で、オレじゃない、とまだまだ悟りきれない自分を主張する、うそぶき男が存在する。

中西スタジオで、十人近くが集まって、ちょっと早い忘年会をした。箕面市の桜井駅で全員集合、近くののスーパーで飲料、食料を買い、10 分ほど歩いて中西さんの家に行った。おおいに喰い飲んだ、旨い時間を過ごさせてもらった、中西さんには感謝であるが、帰ってみると、印刷屋から原稿の不備を言ってきている。朝にも来ていた不備、「1 点ですが・・」という不備がまだ直っていないという。キツネにつままれた気持ちの頭がかっとなって回転しない、という情けない話は、翌日になんとか解決した。心底、ほっととした、気が休まった、という、おおいにボケを自覚したことでした。

092　ネアンデルタール人　041219

　ネアンデルタール人、この名称は若いころから知っていた。マンモスを狩るような野蛮性があるとか、雪の中を毛皮で走り回るとか、そんなイメージが先行していますが、たぶん彼らは小動物や、死肉を喰っていたのではと載っている。今の我々のことを、ホモサピエンス（以後、人という）というのは最近知ったが、ネアンデルタール人は人以外の幾多の枝分かれの一つぐらいに思っていた。なんと、我々人とネアンデルタール人が交配していたということが最近わかったらしい。骨格模型の写真を見る限り、「ちょっと華奢かな　ちょっと大きく　骨太かな　これぐらいは　個体差のうちと　違うかな」と思わせる。

遺伝子の異差では別種と認定されるほどに違うので、かつて混血はありえないとされていた。

50～3 万年前に生存していた。地球上で最大 2 万人ぐらい。色白で石器や火の使用はあったようだ。ネアンデルタール人の復元された顔や身体を見る限り、オレには、なかなか美形で魅力的に映る。

人がアフリカを出た、10～5 万年前に中東で交配が始まり、アフリカ以外の全世界に散らばったのではという。人の祖先というより始まりは、遺伝子を見ると、「たった一人の　女性だ」と先生方は言う。

1856 年ドイツのネアンデル谷で最初に発見された。とはいえ、ヨーロッパでも、ネアンデルタール人以外の、人に近い人類がいくつかいたらしい。

スヴァンテ・ペーボ著＜ネアンデルタール人は私たちと交配した＞スエーデン人の生物学者、なんとオレより十歳も若い。本の中に分子生物学、DNA、の話が出てくる、新しい学問分野はどうもちんぷんかんぷん。福岡博士が、「脳の細胞も　日々　入れ替わっていっている　１週間前の約束なんて　１週間前の細胞に聞いてくれ」なんて面白い話が出てきている。名前は忘れたが宗教学者が、「心はどこにある　脳にある　脳は　分子や　電子や　化学物質　これらが飛び回っている」こんなことを見つめていると、「人間の存在は」「自分の考えは」なんてほざいたところで、ほざいているのは、分子君か、電子君か、化学物質君か、どうも妙なことになってきたと戸惑っている。

ペーボ先生、医者ながら、古代のミイラ DNA を調べていた。オレは素人ながら思うに、口の中をくちゅくちゅして DNA を採取するといっても、人の口のなかは細菌がいっぱい、ごみがいっぱい、そんな中から人の DNA が採取できるのかな、目に見えないマクロの世界、よくわかるもんだとオレの脳、不思議が蔓延だ。ペーボ先生、苦労に苦労を重ねらしいけど、先生たちも早い者勝ちの競争、完璧な研究を一番早く発表するのが研究者の世界らしい。こんなことを聞くといささか興ざめで、笑ってしまうねえ。

更科功先生が面白いことを書いている。: 人とネアンデルタール人との男女関係。両者の体格はほぼ同じ。ネアンデルタール人はヨーロッパという寒いところに適応したヒト族なので、おそらく色白だっただろう。ネアンデルタール人は私たちから見ても、それなりに魅力的だったのだろう。自分たちよりちょっと華奢で、ちょっと色黒で、上手に石器を作る手先の器用な人類といったところだろうか。本当にそんな両者が、交配することがあったのだろうか。

脳のことを考えてみる。それこそ人は、心や気持ち、考えや言葉、そのほかたくさんの行動、数え上げれば数限りない単語が浮かんでくる。ただ知っているのは、脳は、ふにゃふにゃした物質、それこそ標本でしか見たことはないが、まぎれもなく単なる物質でしかない。そんなところにオレの世界があるんだね。

093　ぼやき　091219
寒くなってきた　まだ　なれて　いないんだ　このさむさ
ぞくぞくくるねえ　ぶるぶる
すきま風　こんなかぜ　へやのなかを　すっとはくと
それなりに　爽やかなんだけど　いまは　ぶるぶる
もっと寒くなる　これから

いつもこの季節　けんこう診断にいく
だけど　このさむさ　げんきなんだ　オレ
暖かいころは　なんだか　しんどい　だっけど　今は　げんき
あさ飯をくわずに　いかないと　また来たよ　けんこう診断
はい　なんにもなし　これでほっとする

かわらをはしってかえってきて　シャワーを浴びた
ストーブをつけ　ちょっとまって　あせがでて　まだからだが
あったかいうちに　おんすいの　せんを　ひねり
ぬくい　ぬくい　じゃばしゃば　あたまを　からだを　あらい
でてきたら　すとーぶの　前

ばんめしはなにをくおうかな　きゃべつがあるな
そとに　わけぎは　はえて　きている　ねこのしょうべん
いいよそんなもの　洗えばとれる
めりけんこ　いまどき　めりけんこ　なんていわないよ
こむぎこ　と　いうんだよ　めりけん波止場じゃ　あるまいし
ええそうなの　おれ　ずっと　めりけんこ　と言ってきたよ
野菜だけの　おこのみやき　これがうまいんだ

灯油をかってきた　ストーブの油は　すぐにへる
糊と　だれかがやぶいた　しょうじを　はりかえないと
あぶらをいれる　ぽんぷも買った　はりがね　と　ひも　もかった

ひさしぶりに　あかい　絵を　かいている
あとりえが　赤いろで　あかるくなった
あおいろや　みどりいろ　ばかりつかっていると
さびしく　なるねえ　あか　いろはいいねえ

そうだ　きょうは　朝から　陽が　てっていた
てんきよほうも　晴れだといっていた　のに　霧雨がふった
走って　いたら　なんだか　ぽつり
まさか　ふらないよね　だけどそらが　暗いねえ
ほんとうにこつぶの　雨が　だらだらぽつり
かえるころには　じめんが濡れてきた　ふらないと　いったじゃないか

094　安威川　101219

　時間は午後 3 時、河原にいる。陽が輝いている、暖かい。今の季節、5 時になれば薄暗くなる、3 時とはいえ日暮れの 2 時間前、3 時は普通におやつの時間、昼過ぎの真っ盛りという認識があるが、この季節の 3 時はもう夕方と呼んでもおかしくない時間だと気づいた。ススキの穂が綿状になってきている、強い風が吹けば、そんな白いふわりとくっついたものが飛んでいきそうだ。草もススキの穂も陽を浴びキラキラ燃えている。昼のきつい陽の光と、夕方の少し傾いた斜めからの光が混ざり合い、まわりを照らしている。その照らし方が微妙な見え方をする、ススキの穂は空に向かって白い蒸気のようにあがっていく、地面に生えた草の葉は一本一本が金属的な照り返し、枝やゴミは黒くみえ、その上を馬でも走ればという風景が一瞬に切り取られる。なんと今日は全く雲がない、全部が青空だけれど、かすんだような青さだ。

河川敷をネットで調べると、土手の下の通路の事だと理解していたが、専門用語がたくさんあり、ますますわからなくなる。なので今まで通り、「河川敷とは　土手の内側　水が少ない時の遊歩道　草が生えたところ」としておこう。オレ、毎日やってきてお世話になっている安威川、洪水時にお水を流すためにと大工事、中州に積もった土砂を重機で運び去り、コンクリートと水だけになってしまった。水の中に生息していたたくさんの魚たちはどうなったやら、草やくぼみ、流れのはやいところ遅いところがなくなれば、生きづらかろうと思われる。「あの自然がいいんだ　土だけの安威川がいいんだ」「いやいや　近代都市　治水は欠かせない　工事は欠かせない自然も大事だが　治水はもっと大事」てなことの、ののしりあいではなく、話し合いだね。

さてこの安威川の河川敷を毎日走っている、工事の場所を避けて、5 キロほど下流を毎日訪れている。下流は下水の放流がありいささか薬臭く匂うのだけれど、上流に比べ流れもゆったりとしている。いつも太公望がいる処がある。この辺りは土砂の工事がされておらず、中洲があり、大きな木もあり、水の流れが蛇行している。4,5 人のおっさんが、多い時には 20 人ぐらいのおっさんが、釣り糸を垂れている。オレと同年輩か、十歳ほど上か下か、よくまあと感心するほどに毎日そこで楽しそうに仲良く釣っている。上流は 10 センチぐらいの小魚を釣る連中が多かったが、ここの下流では皆さん鯉が専門のようだ。たまに引っかかったのを見るが、50 センチ前後の丸々したやつを大きなタモですくい上げ、ご満悦ののちに水に返している。いつも思うが、「食わない魚を　釣って　面白いのかねえ」「せっかく　時間をかけて　釣っているのだから　晩飯のおかずにしたいよね」「だけどこの水では　喰う気が　しないよねえ」安威川の水も以前に比べ透明にきれいになったが、まだまだ高度成長時代のヘドロが泥の底にたまっているはず、きれいなのは表面だけかな。

少し前の文章が出てきた。少し前といったがほぼ20年前、まだ若かった、そんな馬鹿なというかもしれないけれど、オレなりに、溌溂としていた。「一昨日も　ここへ来た　そのときはセーターを着ても寒かったが　Tシャツ一枚でも暑い　ラジオが今日は　5月の暑さだという　淀川　河川敷　画を描く」二日続けて淀川まで絵を描きに行っているようだ。今はもう淀川までひとっ走りというような元気はない、とは言いながら先日、守口まで自転車で飲みに行ったか、ということを思いだす。でもそんなことでもないと、「えいやあと」自転車が走らない。

「でもまだ俺燃焼しない　100%いっていない　まだ灰にならない　マツマツ」「アートは　白い灰にならんと　でないと画は　出来上がらない」絵が満足できない、まだまだ到達できないと愚痴っている。これはよくわかる。あの頃は、気持ちが蛇行し、絵が一本の線に連ならなかった。当時は、こう言って自分を慰めてきた。「絵描き職人になってはいけない　自分の絵が　出来上がったら　それでおしまいだ」自分の絵が出来上がらないことにやきもきしながらも、「出来上がったらおしまいだ　ヤキモキ　蛇行するのがいいのだ」と言い聞かせ、慰めてきていた。今、なんだか、日々、「お　いいや」と筆がおける日が多くなってきた。それはいいことだけれど、昔のように、「あかん　だめだ」と自身を恨む日のほうが楽しかったような気がする。

095　感謝祭　161219

若いころからいまだに続いている仲間が三人いる。吉谷君はなくなった。福永さんも奥さんを亡くして元気がない。アメリカ在住の仲野さんは2年前、「日本に行くので　泊めてくれ　もう気軽に泊めてくれるところが　なくなった」そんな予約があったが、ばったりと途絶えた。スカイプ電話も今まで年に何度かあったが、それも途絶えた。フェイスブックでたまに何かを言っているようだけれど、覚醒しているのやらわからない。

2007年、仲野さんからのスカイプ電話を文章にしていた。

「アメリカに住みついて34年間、友人達や家族が集まる賑やかな11月の感謝祭には，ほぼ毎年、誰かしらの招待を受けて夕食をごちそうになった。そこでは、持ち寄った数々のごちそうと、かならず七面鳥の丸焼きがテーブルの真ん中にあり、人はそれをターキー（turkey）と呼んでいた。」

「普通、英語で turkey とはトルコ国を意味するので、この大型の鳥が何故ターキーと呼ばれてきたのかその名前の由来を質問してみたのだけれど、誰も知らない様子だった。」

これは調べると、七面鳥をアメリカ大陸から持ち帰ったのはスペイン人だった。ヨーロッパでは、イスラム世界からの珍しいもの全てを、「ターキー（トルコのことをターキーと呼ぶ)」としていたらしい。

「アメリカ人ならば、その日（感謝祭）に限って絶対に触れては成らない事を、この無知な jap（仲野さんが自分のことを表現している）が執拗にだれかれともなく質問し、皆を当惑させていたらしい。その場にインデイアンがいたら、きっと憤然として、この様に云ったでしょう。「オイ　泥棒野郎の恩知らず」

1600年ころというと今から400年前のアメリカ。イギリスから植民地のアメリカへ移住した一団は、冬が例年になく厳しく、春がくるまでに病気や食料の欠乏で大勢の死者を出した。近辺にいたインデイアンがトーモロコシなどの植物栽培を教授して助けた。やっと豊穣の秋を迎えることができ、インデアンを招いて神の恵みに感謝し、ともにごちそうを食べた。インデイアン達がその祝宴を祝って持って来たのが野生の七面鳥だった。ヨーロッパ人は七面鳥のことをターキーと呼んでいた。

仲野さんは政治の話が好きで、いつも何かに憤慨し、こうであるべきだと主張していた。考え方が右翼的なのかもしれないが、その方面に音痴な俺には方向が分からない。

政治の世界で人権が常に叫ばれる。人権なんて皆無のところもある。号令一下、王の命令、王の指図が行きわたり、国民が王を拝み、慕い、敬う、そんな姿の理想郷もあるやも。

矢が飛び交い、鉄砲の弾が飛び交い、血しぶきが、亡骸が散らばり、強くならねばと願いつつも、おろおろ生きるたくさんの人々。

アフリカやら、中東やら、南アメリカはどんな姿になっているんだろう。人権どころか、人命が危うい。衣食住がなく、いつだれかに殺されるやもわからず、盗み盗まれ立っているのかな。

ひとたびぬかるみにはまれば、あがけども抜け出せず、おのれの命のかすかなろうそくの炎を意識しつつも、ただ黙ってそれを見続け、ただ黙って火が消えていくのを　おのれながらに眺めているだけしかないのかな。

今日の一日が暮れていく。何かを喰って、何かをして、何かを出して、生きていた。

096　鞍馬天狗　181219
73歳の　ジジイ　になってしまった
明日は　健康診断に　行こうと　思っている
翔べるかな　もうちょっと　こけたら　アカン

＜能の本＞これは漫画本でもあるが、この中に鞍馬天狗の項がある、「へええ　もともとは　能からきているのか」とまず驚き。

オレがまだ10歳に満たないころか、嵐寛寿郎演じる鞍馬天狗が、刀を振り回し、見得を切っていた。角ばった黒い覆面をかぶり、活舌の悪い嵐寛寿郎が唾を飛ばして叫んでいたのを覚えている。大仏次郎の小説＜鞍馬天狗＞鞍馬天狗と名乗る勤王の志士が、幕藩方の新選組をやっつける話だ。

能の鞍馬天狗：源義経が幼少時代の牛若丸の話。源平の戦いで源義頼は平清盛にやぶれた。平清盛は義頼と愛妾、常盤御前の間にできた三人の子を、「常盤御前が　自分の愛妾になる」という条件で殺さなかった。鞍馬に預けられた牛若丸（義経）が、打倒平家の信念のもと、大天狗から兵法を授かった。

大天狗：やがてあなたは、驕れる平家を西海に追い下し、波煙る西海の海原で、伝授した浮雲に乗り、自在に飛べる奥義をもって敵を平らげ、雪辱を果たすことができるでしょう。私はあなたをお守りする覚悟です。今はここでお別れしましょう。

能では、山伏が現れる。「何を隠そう　われは鞍馬山で歳を重ねた大天狗である　牛若丸、あなたは　兵法の奥義を学び平家を打ち滅ぼされる　お方だ」 舞台は、華麗に演じられる。オレは観ていない、観なければ・・。
「花咲かば、告げんと言いし山里の、使いは来たり馬に鞍、鞍馬の山の雲珠桜（うすざくら）、手折枝折（ておりしおり）をしるべにて、奥も迷はじ咲き続く、木陰に並み居て、いざいざ花を眺めん。げにや花の下の半日（はんじつ）の客、月の前の一夜の友、それさえよしみはあるものを、あらいたわしや近う寄りて、花をご覧候へ。」

大癋見（おおべしみ：べしみとは口を一文字にしてふんばること：能では天狗役）という面を見た。能では強そうな一面、すぐに負けてしまう敗者の姿らしい。そういう前振りは別にして、この面を見たときに、ジワリ感動した。我々モンゴロイドの顔ではなく、アフリカ、中東、インド、といった地域の人の顔を思わせる。こういう顔にあこがれる、こういう顔でありたい、こういう顔ならば世界が見えるのでは、天が仰げるのでは。

オレの絵の最近は、抽象表現が多くなってきた。人の顔であったり、自転車であったり、楽器演奏であったり、その具体性、具象性はそのままなんだけれど、それが線一本、線の幅も、「これは線じゃないよ　面だよ」といわれるぐらいに幅広く画面を走らせる線。ぽたりと絵の具が落ちた面、「それで　どこが　具象なんだ」といぶかられる画面構成になっている。

ところで、たまには、遊び心、ケタイな試作品、具象の顔を描いてみたくなる。具象の顔とはいえ、このオレのこと、まともに顔の絵が描けるわけもなく、線をゆがませ、面をたたきつけ、それでもこれが鼻、これが頬、と目をうっすら閉じれば画面にそんなようなものが浮かんで見えるかもという程度だが、描いている。鬼の顔でもあり、憤怒の顔でもある、思考の顔でもあり、と様々に言うが、画面の顔は黙して語らない。能の大癋見の顔、十二神将の顔、神道の神楽の面、いいものがある、ぞくぞくする。

お面をつけて練り歩いてみたい、まわりのみんながお面をつけて、どなたかな、怒っているのかな、笑っているのかな、そんなことを気にせずに、お面に話しかける。情けない顔のお面は、情けない顔のままで大笑いする。笑っている顔のお面は、笑った顔で、怒鳴りつけてくる。なにがなにやらわからない、はっきりしてくれと思ったところで、そんなところにはっきりはない。

097 山の話 221219

今年もあと十日ぐらいで終わる。今年一番の思い出は槍ヶ岳だ。同じ歳の山田さんと登った槍ヶ岳、これが今年一番の山だった。雨にも降られず真夏の太陽きらめく北アルプス、よかったですよ。新保高温泉から槍平までの行程、これがしんどい。今までここは、重い荷を背負ってもルンルン気分で歩いていた、きついなんて思ったことがない。コースタイムでは4時間半となっているが、今回は1時間以上も余分に時間がかかったようだった。テントと食料、重い荷を担ぎ、ヒーヒー言ってテント場に着いた。槍平までがあれほどしんどいとは、「オレもジジイだねえ」といまさらながらに驚いている、このコースはこれが最後にしよう。槍への往復は前日の疲れが残っているとはいえ、槍平までに比べれば、何となく登れて下れたように思う、とはいえ、何度も休憩をとって上まで登った。我々が一番の年寄だったと思うが、ちょっと若い連中も、皆さん、ヒーヒーハーハー言っていたのを見てましたぞ。今でも思うが、上の小屋ではカレーライスを喰ったが、ラーメンにしておくべきだったといまだに悔やんでいる。それともう一つ、三日目の朝を起きテントをたたみ荷を背負って車まで帰った「さあ　風呂だ」と車を走らせたのはいいが、バスターミナルのある温泉に寄れずじまいだった。道を曲がりそこねてまっすぐ走ってしまったのだ。秋に西穂山荘から焼岳に登った帰りは、迷わず目的のバスターミナルに寄れたが、3階の温泉風呂は廃業していた。もっともすぐ隣にもっと大きい温泉風呂があり、そこに入った。槍では山田さん、「風呂　なしでいい　このまま帰りましょう」三日間、大汗をかき歩き続けた身体で、車を走らせた。飯も、高速に乗る前、ガソリンスタンドの横にあった中華屋さんで、冷やし中華を喰っただけだった。

十年前の槍ヶ岳の話がパソコンの中にあった。ちょうど今頃に季節、澤山さんと二人で雪の真っ白な道を進み、駐車場から1時間ぐらいの小屋で一泊、翌日、槍平避難小屋で一泊、悪天候で早々に引き返した。

新穂高温泉、登山者専用駐車場に車を止め、登山の服に靴に着替え大きなザックを担ぎ出発。今回の予定は、駐車場から1時間歩けば、すぐのところにある穂高平の小屋で一泊。翌日は槍平避難小屋まで歩いて一泊、三日目は槍ヶ岳を往復して槍平避難小屋でもう一泊、新穂高温泉の登山者専用駐車場まで帰り、その日のうちに帰阪するという3泊4日のコースだった。ところが天気は悪い、曇天続き、好転の兆しもなし、どんどんひどく、吹雪になりそうだった。滑落、雪崩、遭難の話が飛び交い、ヘリコプターが飛び交い、これはやばいと、槍ヶ岳登頂はあきらめ、槍平から引返した。

雪の山から下りてきた。「やっと、無事に車にたどり着いた」と風呂に向かった。人間の身体は勝手なものなのか、うまくできているのか、雪の山の中では、「暖かい、手袋がいらない」と言っていたのに、やっと車にたどり着き風呂に着いたら、「やあ～寒い」身体じゅうがゾクゾクきた。一日じゅう山の中を歩いてきて、車の中に入ったらすぐに身体の調節機能が、自然界モードから都会モードに替わったようだ。温泉風呂のあるバスターミナルは、標高は高いとはいえ、先ほどまで歩いていた山の上の方がずっと寒いはず。

槍平の小屋付近、例年正月前後の季節、何十張りの色とりどりのテントで賑わっていたが、今年は避難小屋に十人ぐらい、テントも四、五張りしかない。去年の正月、雪崩でテントが埋まり何人かが亡くなった。その供養に来ている人もいた。話を聞くと、小屋のそばでテント泊の人たち、どこからか飛んできた雪に押しつぶされ亡くなったそうだ。「雪崩は　木のない平地に飛んでくる」「急斜面はもちろん恐いが　雪崩の着地点　平らなところも　恐いんだ」新雪の表層雪崩は、フワッとした雪が、フワッと、超スピードで落ちてきて、谷で止まらずジャンプして川の反対側にまで飛んできたのかも。

何年か前の笠ヶ岳の話。真冬だというのに雪ではなく雨が降ってきた。ドカーンと大きな音が何度か聞こえた。朝起き、「こらあ　だめだ　引き返そう」ということでテントをしまってザックを担いだ時だった。さあ渡ろうとしていた目の前の大雪渓が大音響で崩れ落ちた。強烈な底雪崩だった、電車のホームに立っていて、4.5本の快速列車が目の前を通り過ぎるような雰囲気だった。もしそこにいたらオレの身体は木っ端みじんになっていただろう。いずれにしても雪崩には会いたくないものだ。

098　峰床山　261219
◎またまた峰床山。朝 6：20 家を出て、坊村の駐車場を歩き始めたのが 8：20.途中の峠あたりは凍結がないかと心配したが通常だけど、気温は 0 度ぐらい、家々の屋根、草木も霜が降りて白い、まもなく雪が積もるだろう。
◎同道の久子さん、「このルートで　登りませんか」と地図を見た。地図を見て、ルートを作ったそうだ。「猿のような人」と表現するが、昔の山仲間の山下さん、先週あったばかりの彼もオレはそう表現している。
◎30 分で林道が現れた。天気がいい、雲一つない青空、地面に写る影がきらきらする、大きいモミの樹が多い。
◎林道といっても荒れている、四輪駆動の軽でも通れない、そこを道なりに歩く。「上に登る　道が　ないかな」なんと今日は道なき道を登る、冒険山である。歩き始めて汗が出たが風はヒヤリ、陽が当たる斜面は光っている。全く人が通らない林道の地面には苔が生え、そのコケに霜が降り、アオカビ色の絨毯を歩く気分だ。
◎なんだか登れそうな斜面が見つかった。なんとか二足歩行で登れそうな斜面を登り始めた。でかいモミ、大人三人で囲っても足らないような太さ、これは最高記録だけれど、上のほうが折れて無くなっている。
◎四つん這いで登ることを、「四輪駆動」といっている。杉の植林地帯は、山仕事の人がうまくジグザグに道を作ってくれている。「けものみち　よりは　ましか」と消えかかった道らしきもの、四つん這いの登り、上のほうに空が見える、「もうちょっとだ」なんと、左の靴の紐がほどけた、「こんなところ　直したら　転げ落ちる」
◎やっと平らなところに上がれた。「ここはどこだろう」ポコリンポコリンのなだらかな尾根は地図が読めない。こういう時こその GPS、これは便利だ。画面に地図が現れ、現在地が分かる、「こっちだ」
◎ポコリンの尾根道を右へ左へ、西のほうに向かう、小さい緑の樹以外は、このあたりの樹々は全く葉を落とし、細い枝が無数に天にある、ヤドリギがあちこちにふわり浮かぶ、ミズナラ、コナラらしい。
◎やっと登山道にでた、「おお　オレがつけた　赤いひも」感動の再会だ。10 月末と 11 月に 2 度ここに来ている。アトリエにあった赤いウエスを細く切り、20 本ほど持ってきた。多少色あせ黒ずんでいる。
◎12 時に、おぐろ峠にやってきた、そのまま休まず、上で弁当にしようと歩き出した。腰が痛い、身体がだるい、山が中止になっては大変、昨夜の寝不足、最後の上りが長く感じた。
◎峰床山のてっぺん、雲一つない青空、お気に入りの枯れ木がある、恐竜の骨のように真っ白に曲がりくねり伸びている。向こうの山々、霞んではいるがまる見えだ。
◎弁当を広げた。オレは五目飯を詰めてきた。サラダをいただいた。リンゴのワイン煮をいただいた、これはおしゃれなお菓子、ワインと砂糖で煮るのだそうだ。
◎おぐろ峠から鎌倉山に向かって進む。登りで付けたテープの赤がチラリ見える、「次回　一人で来た時も　こいつを　たよりに」どんどん進むうちに、またまた道に迷ってしまった。「あれれ　これはちがうよ　先に道がない」目を凝らして目印を探すがどこにもない。「がはは　また迷った　こういう時は逆戻り」と言いつつ伝家の宝刀、GPS では　尾根が一つ間違っている。
◎このあたりの山、同じようなポコリンの尾根、右でも左でも同じように歩けそう、地図を見る限り、まっすぐ歩けばよさそうなものだが、間違うのだ、迷うのだ、笑いだね。
◎登山道に戻ってどんどん進みだした。ところどころに赤いテープを巻きつけた。「え　カメラがない　落とした」「なんと馬鹿な　カメラは古い　買い替え時かな　レンズは惜しい　なんと馬鹿な」引き返した、迷ったところで、太い倒木をくぐった時に落としたようで、カメラに、袋に、ナイフが、散乱していた。「ありがたい」
◎やっと鎌倉山まで帰り着いた。峰床と鎌倉の間は、上り下りが続きかなり体力を使う、冬のこの季節なのに、1.5 リットルの水が帰るころには無くなった。
◎4：30 林道まで下りてきた。暗くなるのは 5 時過ぎ、車までは何とか真っ暗になるまでには着きそう、カメラ事件で 30 分ほどロスしたが、なんとか下ってきた。
◎最後の急斜面、樹が生い茂った山の斜面は見えにくい、一歩一歩じっくり下った、今日も 9 時間近い行動時間だった。先日来、腰がおかしい、ぎっくり来たら大変だ、と思いつつ、風邪かもしれないと思っていた。初めの二本ぐらいは身体がだるかった、峰床の直下ではばてていた、「はやくこい　てっぺん」と小さく叫んだ。

099　花　291219

　京都大学生態学編＜生物の多様性ってなんだろう＞分子生物学はむつかしすぎる、生物学、生態学、こんな学者がいるんだと聞かされ、どんどん特化していって、グラフと数式と電気信号が並び、なんだかほんとうにわからない。目に見えない分子の世界、どうもなじめなかったが、この項だけは素人むけで面白い。

酒井章子著＜昆虫を誘惑する花たちー花の多様性を読み解く＞
◎300 年前までの生物学者は、「花は虫たちの寝室と食堂」「おしべは植物の排泄器官」と考えられていた。

◎18 世紀になって、「花は植物の生殖器官だ」という発見は生物学者も一般の人々にも衝撃を与えた。

◎オスとメスが交配することによって新しい個体が生まれることを、有性生殖という。

◎動物は鳴く、動く、探し回る、交配相手を見つけるが、動けない植物はどうするか。

◎植物は色のついた花びら、香り、たんぱく質に富んだ花粉、甘い蜜、これらで動物を呼ぶ。動物はたくさんのたんぱく質や蜜が欲しい。植物は、確実に雄しべが作った花粉をよその雌しべに運んでもらいたい。

◎杉やヒノキは、風が黄色くなるほど大量の花粉を飛ばす、送粉というが、うまく届かない、受粉の確率は低い。

◎ほとんどの植物は雄しべと雌しべを一つの個体として備えた、両性具有である。自分のものを受粉するのと、他の個体のものを受粉するのと、両方があり得る。一つの花の中の雄しべと雌しべが交配するならそれが一番簡単。生物の世界はクローンではだめなのだ、ということはまた後日。

◎自家受粉専門の植物とは、新しく開けた場所に真っ先に分布をひろげる植物。寿命の短い草木。

◎無配生殖の植物は、遺伝的には親個体と同じクローンである。ムカゴ、竹の地下茎、セイヨウタンポポの種。

◎植物は送粉と、果肉を発達させ動物の餌にすることによって、種子を運んでもらう仕組みを作った。

◎種子の散布には、風のための羽、水に浮くためのコルク化、植物もいろいろ進化している。

　夏、山に登ると高山植物が、かぼそく咲いている。都会や里の花は大きいが、高い山の花はいくら大きくてもコインほどもないものがほとんどだ。色は白・赤・ピンク・黄・紫と百花繚乱のさまだけれど、小さい花々が、冷たい風に吹かれてそよそよと咲いている。「お花畑だ」と皆さん騒ぐが、「オレのアトリエのほうが色はきれいだよ」と心の中でいつも悪態をついていた。
　花が長年かかって、花粉を運ぶ相手を探し、その相手が好む色や香り、蜜やら栄養を工夫して今に至っている、こんなシステムを作ったほうも、作られたものを利用しているほうも、すごい世界だ。
　花は、「ちょっと　色を変え　香りを濃くし　蜜ツボを浅くする」鳥や昆虫は、「あの花が最高　この色はちょっとねえ」なんてお互いに思い感じることを伝えあい、子に、またその子に伝達していって、百二百年経った今完成したのか、完成間近なのか、発展途上なのか、自然の営みは息が長いねえ。
　そんな花を、「きれい　いい香り」と人間が大量に育てる。もっと大きく、もっと鮮やかに、と工夫を加え改良していく、「これは不自然だねえ」

100　大晦日　311219

いよいよ今年も終わる。朝から冷たい雨が降っていた、しとしとやむ気配もなく降っていたが、午後から雨音がしなくなった、とはいえ曇り空のままだ。「よし　河原へ行こう」とやってきた。雨なのか、年の瀬なのか、人がいない、魚釣りのおっさん連中はまったくいない、散歩する人走る人も一人会っただけだ。

山はたくさん登った。数えると二十数回登っている。なんといっても、アルプス、槍ヶ岳と焼岳、これが最高だった。今年の前半の山はもう半年以上も時間が過ぎいささか記憶から飛んでいるが、秋の峰床は迷いに迷い、けっさくな山だった。これからは雪山のシーズン、何度か楽しみたい。オレの車はノーマルタイヤなので、電車で行ける愛宕か比良あたりしか行けないが、ぜひ行きたい。

絵もたくさん描いた。今年こそはいい絵がいくつかあるぞ、展覧会の用意をするのが楽しみだ、「いい絵ばかりだ　選ぶのに苦労するねえ」なんてことを期待しているが、「がっかりさせないでね」とひとごとのように言っている。2年ぐらい前、毎日のように絵のサインをしていたが、いざ展覧会だということで選び始めて、その駄作ぶりに唖然としたことがあった。慌てて修正をした、修正しきれない奴はごみ箱に捨てた、という苦い思い出がある、たった2年前のことだ。とはいえこれらの絵は、小さい絵、3号と6号の話だ。

大変だったのは、下の娘の病気。1年前の秋ぐらいから、「歩けない」とちょくちょく帰ってきていたが、「ほんとに歩けない」と言い出し、いくつかの病院巡り、今年1月に阪大の内科に行った。二人目の医者がすぐに、MRIを予約し、その画像を見て翌日緊急入院になった。MRIの帰り道に三人で寿司を喰っているところに、緊急入院の連絡があった。それから、阪大、森之宮病院、阪大、森之宮病院入院が続き、退院したのが6月だった。今は多少歩けるようになって我が家に同居している。そんなことがあったので時計の針がなかなか早くは進まなかった。夏以降は小康状態ということになって、老人の時間はあっという間に大晦日になっている。我が家の今は、「健常者のオレが　ふたりの身障者をかかえて」なんて冗談を言いながらも、生きている。家事と日々の買い物にも走っている。

12月に入って三回も大酒を飲んだ。2年ぐらい前から大酒を飲まなくなっていた。「飲むと翌日がつらい」とセーブしていた。一回目は衣川さんと新大阪の店で飲んだ。最初から冷酒で始めた。おいしい和風料理、話も弾み、「ええい　2時間で帰ろうと思ったが　もっと飲もう」と衣川さんも怪気炎。翌日のメールで、途中から記憶がとんだらしい。二回目は人権バスツアー。朝のバスからちびちび飲み始め、夜の7時ころまでちょっとずつ飲み続けた。三回目は近所の福田さんら四人と茨木の和風料理の店。これまた最初からガラスの酒落た二号が入る器でガラスの猪口に日本酒をちびりちびり、何度もお代わりをしていたと思うが、回数はわからない。また酒が飲めるようになってきているのかなと思いつつ、あまり飲まないようにしよう、と心がけなくては。

もう出来上がりそうとアトリエに広げている絵が、小さいものも含めて10枚ぐらいある。「こいつらを　やっつけて　正月にしたいな」と思いつつ、なかなか進まない。「一日じゅう　今日は　暇なんだ」という時間の流れがいい。何か予定が入っていると、絵を描いていてその予定に描くのを中断され、とぼしい感性まで中断してしまう。悠久の時間がないと、アート生活は成り立たない。

河原の土手の上　対岸の向こうに新幹線の基地がある。その中を東海道新幹線が往来している。がらがらひゅー300キロのスピードで右へ左へひっきりなしに通過していく。年末の今の季節、立ち席が出るような乗車率で走っているのかな、わが上の娘も家族三人で正月の一日に東京に向かっていくらしい。我が家の三人は朝から屠蘇を飲むのかな、いやいや夕方から飲み始めるほうがいいかもねえ。